

飛鳥寺本尊・山田寺仏頭の実測調査と推定復原

美術工芸研究室・平城宮跡発掘調査部

写真測量が仏像の実測調査に応用されるようになって、正確な記録保存ばかりか、従来比較的等閑視されていた仏像のプロポーションについて新知見を提供するところとなった(『年報』1971)。ここでは、ともに当初の頭部のみが現存している飛鳥寺本尊、および山田寺仏頭(興福寺蔵)の実測調査成果を紹介するとともに、現状において可能な推定復原を試みた。

飛鳥寺本尊 「飛鳥大仏」と通称されている現在の安居院本尊金銅釈迦如来坐像は、わが国最初の本格的寺院である法興寺(飛鳥寺)の中金堂本尊で、現存最古の仏像である。しかし像は中世において露坐になるなど荒廃して、体部の損傷がいちじるしく、当初の部分はわずかに頭部と右手の一部にしか認められない。実測調査は、その当初の頭部について試みた。第1図に示したように、その円筒形の頭部、杏仁形の両眼、眉弓につらなる大きめの鼻梁、平滑でかつ直截な額と髪際線などに、法隆寺釈迦三尊に共通する止利式仏像の特色がいちじるしい。しかし罹災による顔面の歪みがめだち、実測図のように正中線を鼻梁に求めた場合、顔面はやや左に振っ

第1図 飛鳥寺本尊実測図

ているのが確められる。

現状で当初と認められる部分は、銅肌の性状と造形的特色から判別して、顔面に集中している。うち、当初の塑形を最もよく伝えているのは、髪際線以下の額・両眉・両眼・鼻梁である。第1図に示した1～10と、a・bの部分は、明らかに当初ないし後世における象嵌・当て金の補修部分である。うち、7(9.0×30.0cm)と8(3.8×10.4cm)は、後補の布貼り錆漆補修が施されているが、これらは当初の象嵌部分が欠失したために補われたものとみられる。またa(14.0×10.5×11.6×7.8cm)とb(20.0×9.5×23.0×9.3cm)は、銅板を打ちだして鉾止め(径0.7～0.8cm)してあり、ことにaでは、鉾に当初からの鍍金が認められるから、これらはいずれも当初の処理とみられる。このように当

第2図 飛鳥寺本尊頭部

初の補修はかなりいじりしかつたものとみられ、それが両眼から両側面部にかけて多く認められるのは注目されよう。鍍金は僅かに点状に残り、白毫の下、両眼の位置の鼻梁両側面、左小鼻の脇、左頬部分のものがその主なものである。

以上のように、飛鳥寺本尊の頭部はかなりの補修が施されているが、それでも当初の塑形が比較的良好に残り、ことに髪際線(地髪厚さ0.2～0.3cm)および両眉から鼻梁に連なる稜線、さらに弾力のある杏仁形の両眼瞼の刻線は、いずれも当初のタガネ処理を残して鋭い。特色のあるのは両眼瞼で、おのおの上・下眼瞼の線が∞字状に有機的に連続しており、法隆寺金堂本尊などよりかなり顕著で、顔面の表情に動的な変化を与えている。これは止利派の仏像の眼瞼における造形的特色として注目される。

第3図は、頭部の写真測量成果をもとに、主として法隆寺金堂釈迦三尊像を参考にし、ほかに発掘調査時に確認された当初の台座、像・脇侍の位置などの資料にもとづいて作成した推定復原図である。一光三尊式の挙身光は、法隆寺釈迦三尊像をもとに、かつては法隆寺像においても付いていた飛天を配し(甲寅銘光背参照)、両脇侍も同像における脇侍を参考にして配した。問題となるのは懸裳部分の大きさであるが、これは発掘調査によって確認された高さ2.4尺、東西13.3尺、南北9.5尺の花崗岩切石の基壇にもとづいたためである(『飛鳥寺発掘調査報告』奈文研学報第5冊参照)。基壇は、上面が平らに仕上げられ、現像の西側に本尊の膝基底部が当たるとみられるつくり出しと、現像の両側に裳裾が当たるとみられる凹みが認め

られ、さらに後方には、径9寸深さ9寸の穴が東西ほぼ対称に掘られており、これらは脇侍像の立った柄穴と推定される。したがって、本尊および脇侍はこの基壇上に直接安置されたものと考えざるを得ないから、推定復原図における三尊の位置もそれに従った。本尊の像高はまず基壇上面の両膝部が当たるとみられるつくり出しから膝張の長さを推定し、これをもとに法隆寺金堂釈迦三尊の中尊にならって、膝張とほぼ同じ数値の白毫高をとって決定したものである。これは、古代仏像の比例の原則、つまり白毫高がほぼ膝張に一致すること（『年報』1970参照）を逆に応用したもので、頭部しか現存しない飛鳥寺本尊のような作例の丈量を復原的に推定することも可能となったわけ

第3図 飛鳥寺本尊推定復原図

である。

山田寺仏頭 興福寺に所蔵される旧山田寺仏頭が、685(天武13)年に蘇我倉山田石川麻呂の追福のために造られた飛鳥山田寺講堂の丈六金銅像の頭部で、1187(文治3)年に興福寺東金堂に移され、1411(応永18)年に罹災して体部を失い、1937(昭和12)年東金堂の修理に際して須弥座の下から発見されたことはあまりにもよく知られている。

第5図は、写真測量にもとづく山田寺仏頭の正・側面図であるが、この場合は、体部が失われて当初の頭部における上下向き

第4図 山田寺仏頭頸部底面

が不明であるため、かりに当初の顔の向きに最も近いフランクフルト基準面（人類学上、眼窩下の凹みと耳珠点が水平な面）に従って図化をおこなった。正面図にみるように、本仏頭の場合でも罹災による顔面の歪みが生じており、ことに頭部の左側面においてそれがいちじるしい。本仏頭が頭上部を欠損しているため、その内部に8個の型持（ $3.8 \times 4.5 \sim 5.6 \times 4.5\text{cm}$ ）・4本のこうがい釘（ $3.5 \sim 6.5\text{cm}$ ）が認められるなど、上代金銅仏像の鑄造技法を知るための好個の作例であることはよく知られているが、実測図でも明らかなように頭部における鑄銅は前方において厚く（ 2.5cm ）、後方では比較的薄い（ $0.3 \sim 0.5\text{cm}$ ）。また、鑄造時のガス気泡による「す」は比較的上方に著しく、頭上部の欠損もそのためによるものかと推測される。また、体部につながる破損部は、鑄造時におけるひき割れが原因であったとみられ、正面や、左寄りの三道下に、当初の補修である象嵌（鋳からくり）の痕跡が認められる。第4図は頭部の底面から内部をみたものであるが、これによっても明らかなように、頭部と頸部とのつけ根部分に鋳かけによる鑄銅が空洞をめぐって附着しているから、この場合においても鑄造時の補修がいちじるしかったものと認められよう。

実測図で注意されるのは、当初の視線がほぼ水平方向を向いている点である。推定復原図（第6図）は、このほぼ水平な視線を重視して、東京深大寺釈迦像はじめ、白鳳時代の小金銅仏・埴仏・法隆寺壁画などを参考にして作成した。

復原図作成のうえで考慮した条件を記せば次の通りである。(1)実測正面図でも明らかなように、頭部左半部は罹災による歪みが著しいので、試みに歪みの比較的少ない右半部を正中線で反転して補正した。(2)体部は、上代の仏像に支配する比例の原則を応用して作成した。

この際、像高が不明であるため、仮に薬師寺金堂本尊にならって定めた。比例の原則とは、
 a 膝張を直径とする円を像の正中線上で地つきに接して描いた場合、上周が仏頭の白毫位置に当ること、b その円の中心を通り、結跏した膝に接する線と、別に三道下に引いた水平線とが肩で交わること、である。ただし、この原則は丈六の結跏趺坐の姿勢におけるものであるから、倚像と推定される本仏頭では両脚は踏下げられて、結果としては膝張は短縮されている。(3)両脚を踏下げたいわゆる倚像の形相は、さきにも述べたように仏頭の視線がほとんど水平方向を向いているため、これに類する白鳳諸仏にならって定めた。(4)中尊の台座・光背は、薬師寺金堂本尊・勧修寺繡帳・法隆寺壁画・埴仏の例にならって、いわゆる宣字形台座に後屏形光背とした。両足下に踏まえる蓮華も同様である。(5)両脇侍像は、かつてこの像の脇侍であったと推定される現興福寺東金堂脇侍をもってこれに当てた。(6)基壇の規模は、現在の山田寺講堂礎石の現状から、当初7間堂であったものと推定、これに応じて、中央間に中尊、その両脇の間に各脇侍が位置するように配した。

第6図 山田寺三尊像推定復原図

以上のように、現在頭部だけが残る上代仏像を写真測量により実測し、試みに推定復原図を作成したが、もとよりその作風や意匠など詳細にわたっては不明なことが多い。しかし、正確な実測図をもとに、少くとも当初の丈量なり規模を推測してみることは、単に仏像の復原的検討だけにとどまらず、寺院址・遺物・建築遺構・文献等の総合的な検討を促すものとして今後に期待されるものが少なくない。

(長谷川 誠)